

## 自律的ならびに他律的セルフ・エスティーム 潜在連合テストにおける刺激語の構成

山崎 勝之\*, 横嶋 敬行\*, 賀屋 育子\*\*, 内田 香奈子\*

(キーワード: 自律的セルフ・エスティーム, 他律的(随伴性)セルフ・エスティーム, 潜在連合テスト, カテゴリー語, 属性語)

### セルフ・エスティームの概念と測定方法の刷新

#### セルフ・エスティームの概念と測定方法の改訂への動向

セルフ・エスティーム (Self-Esteem: SE) の心理学上の研究は、古くは James (1890) に遡り、心理学におけるパーソナリティ関連の研究では中心的な位置を占める 1 つの研究領域として現在もお盛んに研究が行われている。研究の関心事は、この特性が人の健康や適応そして遂行に及ぼす影響であり、この点では SE は好ましいもので、基本的には高めるべき存在であると一般に考えられ、そのことから米国では SE 運動にまで発展するほどの勢いを持った。

しかし、1985年以降、Baumeister, Campbell, Krueger, & Vohs(2003)をはじめ、Mecca, Smelser, & Vasconcellos (1989), Elmer (2001) などのレビュー研究が公表され、SE と望ましい結果の関係はほぼ確認できないか、確認できていても極めて弱い関係か、逆に負の関係であることが示された。しかしながら、このような研究報告にもかかわらず、現在に至るまで SE の研究は旧来の概念や測定法を用いて盛んに行われている。もっとも、一部の研究者は、このような否定的な研究を受けて SE の概念の再考を行い、Deci & Ryan (1995) や Kernis (2003) による新規の概念が導入されてきた。また、次項に示すように、測定法でも新規の方法が多数開発されてきた。<sup>1</sup>

#### SE の最新の概念と測定法

このような動向を受けて最近山崎他 (山崎, 2017; Yamasaki, Uchida, Yokoshima, & Kaya, 2017; 山崎・横嶋・内田, 2017) は、SE を自律的 SE (autonomous SE) と他律的 SE (heteronomous SE) に分ける新分類を提唱している。自律的 SE は、自己信頼心 (self-confidence), 他者信頼心 (confidence in others), 内発的動機づけ (intrinsic motivation) がすべて高まった特徴をもち、健康・適応・遂行を高める、望ましい SE である。一方、他律的 SE はこれらの要素が軒並み低下し、健康・適応・遂行を低める、問題のある SE と定義された。そして重要なことは、自律的 SE の測定は意識上の反応過程を前提とする質問紙等では測定できず、何らかの非意識的な方法を用いた測定方法が必要なことを明らかにしたことである。この点、他律的 SE は質問紙でもある程度は測定できることが示唆されている (山崎・横嶋・賀屋・山口・内田, 2018)。

この山崎らの見解を受けて、横嶋・内山・内田・山崎 (2017) は近年の潜在連合テスト (Implicit Association Test: IAT; Greenwald & Banaji, 1995) の方法論を利用して自律的 SE を測定する児童用の潜在連合テストを開発した。IAT は、基本的に対となる語 (群) の潜在的 (インプリシット, implicit) な連合の強さを測定するテストで、テストを受ける者がその連合やテストの目的を意識することなく自動的、潜在的に連合の強さを測定する方法である。横嶋他 (2017) のテストは、児童用紙筆版自尊感情潜在連合テスト (the paper and pencil version of Self-Esteem Implicit Association Test for Children: SE-IAT-C) と呼ばれ、紙と鉛筆だけで学校のクラス全員など集団を対象として時間制限で実施される。横嶋らはこのテストの信頼性と妥当性を確認して完成させ、すでに学校現場で実際に使用され始めている。さらに横嶋・大上・山崎 (2018) は、このテストのタブレット PC 版の原型を作成し、その信頼性と妥当性を確認している (横嶋・大上・賀屋・山崎, 投稿中)。また、賀屋・山口・横嶋・内田・山崎 (2018) は、児童用の他律的 SE の質問紙を作成している。この質問紙は、児童用他律的 SE 尺度 (Heteronomous Self-Esteem Scale for Children: HSES-C) と呼ばれ、賀屋らにより信頼性と妥当性が

\*鳴門教育大学大学院人間形成コース

\*\*兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究所

確認されている。

### SE 潜在連合テストの発展

こうして、児童用ではあるが自律的 SE と他律的 SE の測定法がそろい、現在学校においてその適用が始まっている。たとえば、自律的 SE を育成するユニバーサル予防教育プログラムを実施して、その効果の評価に SE-IAT-C が使用され、プログラムにより自律的 SE が高まることが報告されている（横嶋・賀屋・内田・山崎，2018）。

このような現況であるが、山崎他（2017）は、本来他律的 SE も潜在連合テストで測定することが望ましいとしている。しかし、現在のところ他律的 SE については潜在連合テストは作成されていない。確かに、自律的 SE と他律的 SE を同じ研究で両者を比較する場合、一方が潜在連合テスト、他方が質問紙を使用して測定すると、実際の特性の違いだけではなく、測定方法の違いからの差異が結果に混入することが予想され、精度の高い研究はおぼつかない。たとえば、潜在連合テストでは意識的な得点操作はほぼできないが、質問紙では可能になるといった類いの差異である。

そこで本論文では、他律的 SE の児童用潜在連合テストを作成する最初の段階として、テストで使用する刺激語（カテゴリー語と属性語）を中心にその選択にかかわる問題について考察する。その過程で、自律的 SE と他律的 SE が 1 つの潜在連合テストで測定できる可能性にもふれ、現実的にそのテストの原版を紹介することになる。

### セルフ・エスティーム潜在連合テストのカテゴリー語と属性語のあり方

#### 自律的 SE と他律的 SE の特徴

自律的 SE の構成要素として自己信頼心、他者信頼心、内発的動機づけを挙げ、これらの要素がすべて高まっていることでこの特性の高さを規定した。この場合注意すべきことは、自律的 SE が高い者にとって、自己信頼心や他者信頼心が高いという意識はないということである。また、自己信頼心を自信と呼ぶこともできるが、その場合も意識化された自信ではないことには留意する必要がある。つまり、自律的 SE の高い者は、自分に自信があるか否かには頓着せず、内から発する心理的欲求（内発的動機）への達成指向が強く、他者に対して親和性があり、否定的にとらえることはない特性とも言える。この点から他律的 SE を規定すると、自分に自信があるかどうかには頓着して、外から発する心理的欲求（外発的動機）への達成指向が強く、他者に対して敵対性があり、否定的にとらえる特性ということになる。

このように自己信頼心と他者信頼心をとらえて、図 1 には、自律的ならびに他律的 SE に加えて、ナルシズム（narcissism）、無気力、劣等感を指標にして、自己信頼心（自信）の水準と変動を仮説モデルとして示

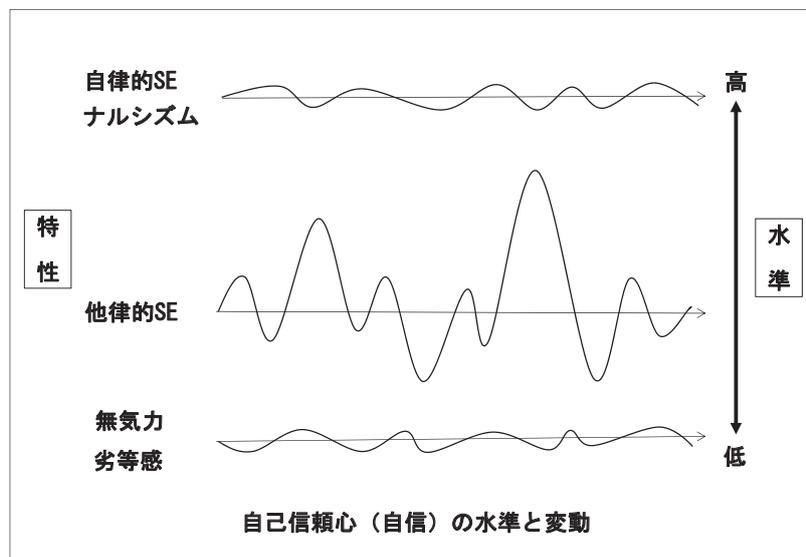


図 1 自律的ならびに他律的 SE，そして，ナルシズム，劣等感，無気力が高い場合の自己信頼心（自信）の水準と変動

した。なお、ナルシズムは、他者信頼心が低く、自己信頼心（むしろ自己優越感）が異常に高まっている特性、劣等感は、自己信頼心が低まっている特性（他者信頼心については未知）、無気力は自律も他律も SE は両方も低まっている特性という観点から規定している。なお、ナルシズムの優越感の意識性は高い。同じ自己信頼心（自信）という言葉を用いても、その意識性は異なっていることに注意したい。図から分かるように、自律的 SE の高い者は自己信頼心（自信）が安定していて平均水準が高く、他律的 SE の高い者は変動性が大きく、その平均水準は低い。また、ナルシズムの高い者の自己信頼心（自信）も安定して高く、無気力や劣等感の高い者は安定していて平均水準が低いということになる。

他律的 SE が高い者の変動性が大きいのは、SE を規定する外的基準を達成すれば一時的に SE は高まり、達成できなければ低下し、達成状況により SE が流動的に変化するためである。そして、その外的基準の安定した達成は容易でない場合が多く、そこから全体的な水準も低くなる。逆に、自律的 SE が高い者の変動性が低いのは、自信の源泉が内在化され、その変動をもたらず外的基準がないことによる。これらの特性は量的に変化することから、たとえば、自律的 SE が中程度に留まる場合は他律的 SE の変動性と水準に近づくことになる。

さらに両 SE の特徴を、自己を肯定的にとらえようとする意識的努力の観点から説明したのが表 1 になる。表 1 では、他律的 SE が高い者が持つ外的基準は何らかの点で他者との相対的な優劣による基準になり（山崎他、2018）、この点から児童生徒にとって身近で、比較対象としての他者の代表格である学級内での友人を例に挙げ、図 1 と同様に両 SE にナルシズム、劣等感、それに無気力を加えてその関係を仮説として表している。自律的 SE が高い場合は、自分も友人も肯定的にとらえ（意識的ではない）、自己を肯定しようとする意識的努力は低くなる。それに対して、他律的 SE が高い場合は、自己と友人を否定的にとらえ（意識的でもある）、自己を肯定しようとする意識的努力が高くなる。また、ナルシズムが高い者は、自己を肯定的にとらえ、友人は否定的にとらえて（意識性は比較的高いものと推測される）、自己を肯定しようとする意識的努力は低い（その必要がないほど高いと把握されている）。さらに、劣等感の高い者は、自己を否定的にとらえ、友人を肯定的にとらえ（意識性の高さは未知であるが高いものと推測される）、自己を肯定しようとする意識的努力もある程度はある。そして、無気力の場合は、自分の捉え方にも友人の捉え方にも関心が及ばないので肯定と否定のどちらでもなく、自己を肯定しようとする意識的努力は低くなる。

表 1 自律的ならびに他律的 SE, そしてナルシズム, 劣等感, 無気力の各特性と自己（友人）の捉え方と自己肯定への意識的努力

自分の捉え方	友人の捉え方	そなわる特性	自己を肯定しようとする意識的努力
肯定的	肯定的	自律的 SE 高	低
否定的	否定的	他律的 SE 高	高
肯定的	否定的	ナルシズム高	低
否定的	肯定的	劣等感高	中
どちらでもない	どちらでもない	無気力高	低

### カテゴリー語のあり方

前項で、自律的 SE と他律的 SE の違いを紹介したのは、潜在連合テストの刺激語の選定を考える場合の重要な資料になるからであった。この違いを考慮して、刺激語がどのようにあるべきか、また選定すべきかについて考えてみたい。

まず、横嶋他（2017）の自律的 SE を測定するカテゴリー語が表 2 に示されている。自分自身に関するカテゴリー語は「じぶんは」と「わたしは」、自分以外のものに関する（対自分）カテゴリー語は「あれは」と「それは」である。刺激語はすべて、男女共通で使用できるものとしている。また、この語数をいくつにするかは難題であったが、1 語では選択負荷が低くなりすぎ、ある程度の語数は確保したいが適切な表現が見つからなかったことで 2 語に留めている。また、自分以外の言葉（対自分語）には他者に関するカテゴリー語を使用する機会が多いが、横嶋らは、Karpinski（2004）が好意的な対自分語を用いた場合の方が非好意的な対自分語を用いた場合より IAT の得点が低くなることを示したことから、対自分語に他者語（友人など）を用いた場合、他者に対

表2 児童用紙筆版潜在連合テスト（横嶋他, 2017）における刺激語（カテゴリー語と属性語）

カテゴリー語		属性語	
自分関連	自分以外関連	自己肯定的	自己否定的
じぶんは	あれは	すきだ	きらいだ
わたしは	それは	すばらしい	くだらない
		じしんがある	ふあんだ
		まんぞくした	やくにたたない

してネガティブな態度を持つ者ほど得点が高くなる可能性があり、この点で自律と他律のSEの弁別性が低くなると考えた。またその場合、自己にも他者にもポジティブな態度を持つ者、すなわち自律的SEの高い者の得点がそれほど高くないことを指摘し、対自分語は中性的な言葉を用いる必要があると判断して表2のように「あれは」と「それは」を採用している。

表2には使用された属性語も記載され（次節で扱う）、「（自己カテゴリー語と肯定的属性語が正答となる場合の成績）マイナス（自己カテゴリー語と否定的属性語が正答となる場合の成績）」が高いほど自律的SEの得点が高くなる。しかしこの尺度は、自分への肯定面だけを測定し、自律的SEの他の構成要素である他者信頼心を測定していない。この点では、潜在的に自己を肯定する者には同時に潜在的な他者を肯定することが付随する可能性が大きいことを想定している。このことは内発的動機づけについても同様に考えられる。潜在的な自己肯定が真に自律的SEの構成要素であるならば、当然そのように予想される。ただし、この論理をもってしても、ナルシズムの高さの混在は弁別できない。また、他者信頼心の連動性を想定したとしても、自律的SEの測度という以上、他者信頼心も同時に測定できる方が望ましい。概念上の共通性から内発的動機づけは潜在的な自己肯定に付随する程度は大きいですが、他者信頼心の高さの付随性はその程度が小さくなるものと予想される。

さて、先の横嶋らのテストの特徴とカテゴリー語の特徴を把握した上で、他律的SEの潜在連合テストの作成について考えてみたい。まず考えられるのは、横嶋らの尺度の自分に関するカテゴリー語を他者に変えることである。児童用であれば、凝集性が比較的高い学級内の友人等が候補にあがる（ともだち、なかま、みんななど）。この場合得点化は、「（他者カテゴリー語と否定的属性語が正答となる場合の成績）マイナス（他者カテゴリー語と肯定的属性語が正答となる場合の成績）」<sup>3</sup>で行われることが考えられる。ただし、この得点が高い場合、内発的動機づけの連動性は低いですが、潜在的な自己肯定が同時に低くなる程度が保証できないのは横嶋らの尺度の場合と同じであり、これらの問題は次節で考えてみたい。

### 属性語のあり方

次節でカテゴリー語の問題をさらに検討する前に、属性語の注意点にふれておきたい。横嶋他（2017）は、自律的SEの潜在連合テストを作成するにあたり、単なるポジティブあるいはネガティブな用語ではなく、よりSEに合致した度合いが高い用語を用いている。これは、SEの連合を直接的にとらえるためには必要で、単なるポジティブ語であれば間接的に高いことになり、直接的にSEをとらえていることにはならない。

たとえば、攻撃性を測定する場合、攻撃的な行動を問う（たとえば、カッとなることがよくありますか）のではなく、攻撃性が高まれば間接的に高まるような結果（たとえば、友達は少ない方ですか）を問うような間違いになる（山崎, 2017）。攻撃性とは別の特徴が友人の少なさをもたらすことがよくあるからである。この点は、これまでのSEを測定しようとするIATで指摘される問題であり、改善を要する問題であった。

この用語の選択は他にも考えられるが、横嶋他（2017）による妥当性の検討から判断して今のところ問題はなく、このまま使用できると思われる。

## 自律的ならびに他律的SEを同時に測定できる方法の模索

上記に指摘したことから、潜在的な自己信頼心と他者信頼心を同時に測定する潜在連合テストの必要性が高ま

る。横嶋他（2017）の自律的 SE の尺度をベースに考えれば、自分に関するカテゴリー語に他者に関する用語を加えて、自他のカテゴリー語と既存のままの自他以外のカテゴリー語（中性語）とする案が考えられる。この場合、自他と中性語の語数を合わせるために、自他関連では「じぶんは」、「ともだちは」とし、中性語は変わらず「あれは」、「それは」となる。そして、A（自他カテゴリー語と肯定的属性語の対提示の成績）マイナス B（自他カテゴリー語と否定的属性語の対提示の成績）<sup>4</sup>の得点が高い場合が自律的 SE が高い、逆に低い場合（B-A とすれば高い場合）は他律的 SE が高くなる。理論上自律的 SE と他律的 SE は一次元上の反対位置にあると考えられるので、この得点化は理にかなっている。他律的 SE が高い場合の得点を高くするには、(B-A) にマイナス 1 をかければよい。

そして、自律的 SE と弁別性が低かったナルシズムの得点は自律的 SE と他律的 SE の中間点に高く位置づけられ、自律的 SE の低さに混在すると考えられる劣等感や無気力も中間点に高く位置づけられると推測される。つまり、このような尺度では、得点の高低両端は自律的 SE と他律的 SE の観点から解釈しやすいが、中間点はさまざまな特性が混入し積極的に意味を付与することができないことを示唆している。もっとも、このような中間点での他特性の混入は既存の多くの質問紙に共通した問題になろう。

表 3 は、これらのことをまとめて表している。この場合の得点は、(A-B) 得点で統一している。表には仮説理論値も示され、自律的 SE と他律的 SE が高い場合は、両特徴をこの得点が表現できることを示している。また図 2 は、同様の変化を図示している。

表 3 自律的ならびに他律的 SE の同時測定 IAT における各特性の得点パターンの推定

自分に対して	友人に対して	得点	理論値	特性
肯定的	肯定的	高	プラス	自律的 SE 高
否定的	否定的	小	マイナス	他律的 SE 高
肯定的	否定的	中	ゼロ	ナルシズム高
否定的	肯定的	中	ゼロ	劣等感高

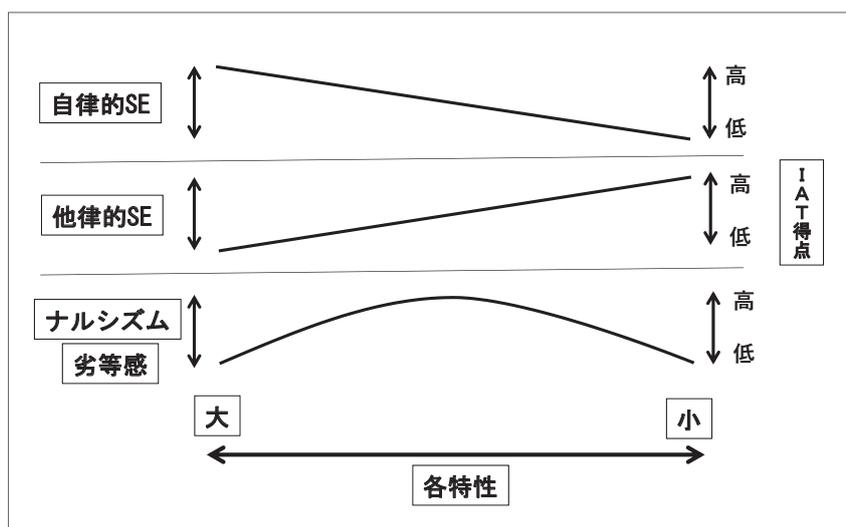


図 2 自律的ならびに他律的 SE の同時測定 IAT における各特性の得点変化の推定

### 自律的ならびに他律的 SE を同時測定できる潜在連合テストの原版の作成

上記の考え方で、自律的 SE と他律的 SE を同時に測定する方法が横嶋・賀屋・内田・山崎（印刷中）によっ

表4 児童用紙筆版自尊感情テストの手続き（横嶋他，2017より改変）

課題	種類	内容	(左側への分類)vs.(右側への分類)	時間
1	練習	属性語	(肯定語)vs.(否定語)	20秒
2	練習	カテゴリー語	(自分)vs.(自分以外)	20秒
3	本番	組み合わせ1	(自分+肯定語)vs.(自分以外+否定語)	20秒
4	本番	組み合わせ1	(自分+肯定語)vs.(自分以外+否定語)	20秒
5	練習	カテゴリー語	(自分以外)vs.(自分)	20秒
6	本番	組み合わせ2	(自分以外+肯定語)vs.(自分+否定語)	20秒
7	本番	組み合わせ2	(自分以外+肯定語)vs.(自分+否定語)	20秒

表5 児童用の自律的ならびに他律的 SE 潜在連合テストの手続き（横嶋他，印刷中より改変）

課題	種類	(左側への分類)vs.(右側への分類)	時間
1	練習	(その他*+肯定語)vs.(自分**・友人***+否定語)	制限なし(8試行)
2	本番	(その他+肯定語)vs.(自分・友人+否定語)	30秒
3	練習	(自分・友人+肯定語)vs.(その他+否定語)	制限なし(8試行)
4	本番	(自分・友人+肯定語)vs.(その他+否定語)	30秒

\*「あれは」, 「それは」, \*\*「じぶんは」, \*\*\*「ともだちは」

て作成されつつある。この新規の IAT は児童用のタブレット PC 版として開発が始まっており、また引き続き紙筆版の開発も平行して行われる予定である。カテゴリー語と属性語は前節で示したとおりであるが、テストの手続きはさらに簡便化している。

横嶋他(2017)の紙筆版 IAT と横嶋他(印刷中)の新規タブレット PC 版の手続きを比較できるように示したのが表4と表5である。横嶋他(印刷中)は、新規版では表5のように簡略化しても同様の精度が保証されると予想している。現在、予備的に適用が開始され、原版が固まり、信頼性と妥当性の検討へと展開している。

## 今後の研究と発展

このタブレット PC 版が完成すれば、紙筆版の開発への取り組みが始まるだろう。現在の児童用の自律的 SE の IAT がそうであるように、紙筆版とタブレット PC 版は同じ刺激語と手続きで行われるので、一方が開発されるともう一方の開発は比較的容易に進む。また、両者を比較しながらの開発は単独での開発よりもスムーズに進行するであろう。

紙筆版とタブレット PC 版はそれぞれ異なった長所と短所がある。タブレット PC 版は、得点化が自動的になされることと、児童がタブレット操作に興味を持つことから、児童のテスト実施への動機づけを高く保って実施できる。一方、タブレットを少なくとも学級の児童数だけ揃えることが推奨され、経費の面で難点がある。この点紙筆版は経費がほとんどかからないが、タブレット PC 版がもつ長所がなく、それが短所になることと、実施にあたり調査紙の準備や実施中に時間を計測するなどの労力がかかる。いずれにしても、両方の版が揃っていると状況に応じて使い分けることができよう。

本論文の最初に記載したように、新規の SE 概念と測定法、そしてその教育が開発されたことにより、学校における SE 教育とその効果の測定は一新されつつある。そしてその新教育は、自律的 SE を伸ばし、他律的 SE を低下させるという理想の効果をもたらしている(e.g., Yamasaki, Michishita, Yokoshima, Kaya, & Uchida, 2018)。とりわけ、これまでの学校教育では教育の効果評価として適用されることはなかった非意識の特性変化が確認されたことは特記すべき現象である。子どもの心的特性の評価と言えは自己報告式の質問紙一辺倒であった学校教育が刷新される可能性をもたらし、この新しい教育と効果評価の普及を迅速に進めることが今後期待される。

## 注

- 1 SE の研究の歴史的変遷ならびに最近の動向については、山崎・横嶋・内田（2017）を参照されたい。
- 2 自己カテゴリー語と肯定的属性語が正答となる場合は、中性カテゴリー語と否定的属性語が誤答となり、自己カテゴリー語と否定的属性語が正答となる場合は、中性カテゴリー語と肯定的属性語が誤答となる。
- 3 他者カテゴリー語と否定的属性語が正答となる場合は、中性カテゴリー語と肯定カテゴリー語が誤答となり、他者カテゴリー語と肯定的属性語が正答となる場合は、中性カテゴリー語と否定的属性語が誤答となる。
- 4 自他カテゴリー語と肯定的属性語が正答となる場合は、中性カテゴリー語と否定的属性語が誤答となり、自他カテゴリー語と否定的属性語が正答となる場合は、中性カテゴリー語と肯定的属性語が誤答となる。

## 引用文献

- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1–44.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In Kernis, M. H. (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp.31–49). New York: Plenum Press.
- Emler, N. (2001). *Self-esteem: The costs and causes of low self-worth*. London: Joseph Rowntree Foundation.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, 102, 4–27.
- James, W. (1890). *The principles of Psychology* (Volume One). New York: Henry Holt and Company.
- Karpinski, A. (2004). Measuring self-esteem using the implicit association test: The role of the other. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 22–34.
- 賀屋育子・山口悟史・横嶋敬行・内田香奈子・山崎勝之（2018）. 児童用の他律的（随伴性）セルフ・エスティーム尺度の開発 – 尺度の信頼性と妥当性の検討, そして教育への適用の考察 – 教育実践学論集, 19, 1–12.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1–26.
- Mecca, A. M., Smelser, N. J., & Vasconcellos, J. (Eds.) (1989). *The social importance of self-esteem*. Berkeley: University of California Press.
- 山崎勝之（2015）. 「学校予防教育」とは何か 鳴門教育大学
- 山崎勝之（2017）. 自尊感情革命 –なぜ、学校や社会は「自尊感情」がそんなに好きなのか？– 福村出版
- Yamasaki, K., Michishita, N., Yokoshima, T., Kaya, I., & Uchida, K. (2018). Effectiveness of a school-based universal prevention program for enhancing autonomous self-esteem at elementary schools: Utilizing a newly developed implicit association test and questionnaire. *Paper presented at the 5th International Academic Conference on Social Sciences*, Sydney, Australia.
- Yamasaki, K., Uchida, K., Yokoshima, T., & Kaya, I. (2017). Reconstruction of the conceptualization of self-esteem and methods for measurement: Renovating self-esteem research. *International Journal of Psychology and Behavioral Sciences*, 7, 135–141.
- 山崎勝之・横嶋敬行・賀屋育子・山口悟史・内田香奈子（2018）. 他律的（随伴性）セルフ・エスティームの概念と測定法 鳴門教育大学研究紀要, 33, 1–15.
- 山崎勝之・横嶋敬行・内田香奈子（2017）. 「セルフ・エスティーム」の概念と測定法の再構築 –セルフ・エスティーム研究刷新への黎明– 鳴門教育大学研究紀要, 32, 1–19.
- 横嶋敬行・賀屋育子・内田香奈子・山崎勝之（2018）. ユニバーサル学校予防教育「自己信頼心（自信）の育成」プログラムの効果 –児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストを用いた教育効果の検討– 学校保健研究, 60, 5–17.
- 横嶋敬行・賀屋育子・内田香奈子・山崎勝之（印刷中）. 児童用の簡易版セルフ・エスティーム（SE）潜在連合テストの開発の構想 –自律的ならびに他律的SEを同時に測定する, 紙筆版とタブレットPC版の測定方法開発に関する理論– 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 33.

横嶋敬行・大上遊路・賀屋育子・山崎勝之（投稿中）. タブレット PC 版の児童用セルフ・エスティーム潜在連合テストの開発

横嶋敬行・大上遊路・山崎勝之（2018）. タブレット版の児童用セルフ・エスティーム（SE）潜在連合テストの開発 - 適応的な SE をクラス集団で測定するための予備的研究 - 日本教育心理学会第60回総会論文集, p.171.

横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之（2017）. 児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発 - 信頼性ならびに Rosenberg 自尊感情尺度と教師による児童評定を用いた妥当性の検討 - 教育実践学論集, 18, 1-13.

# Considerations on the Stimulus Words in the Implicit Association Test for Autonomous and Heteronomous Self-Esteem

YAMASAKI Katsuyuki\*, YOKOSHIMA Takayuki\*\*, KAYA Ikuko\*\*,  
and UCHIDA Kanako\*

(Keywords: autonomou self-esteem, heteronomous self-esteem, implicit association test,  
category words, attribute words)

New concepts and terminologies regarding Self-Esteem(SE) were developed by Yamasaki et al. (2017), in which autonomous and heteronomous SE were distinguished as new SE concepts. Autonomous SE is characterized by high self-confidence, confidence in others, and intrinsic motivation, while heteronomous SE is low in all these three characteristics. Moreover, they suggested that two types of SE need to be measured utilizing nonconscious methods, although heteronomous SE can be partially assessed using conscious methods such as self-reported questionnaires. Regarding nonconscious measuring tools, the Implicit Association Test (IAT) has been often utilized in recent years. After Yokoshima et al. (2017) developed the IAT to measure autonomous SE for elementary school children with reliability and validity, another IAT to assess heteronomous SE has been expected to be developed. When developing the IAT, category words for self and others, and attribute words for SE characteristics are essential. In this paper, first, it was discussed how the category and attribute words should be. Next, in doing so, the current paper suggested the possibility that a new IAT which can simultaneously measure both autonomous and heteronomous SE could be developed. In line with this consideration, the possible candidates for category and attribute words to measure two types of SE were discussed. Yokoshima et al. (in press) has already started to develop a new IAT utilizing the category and attribute words that were recommended in this paper. Finally, the future promising work was discussed, along with the importance of new educational programs at schools in which autonomous SE is enhanced while heteronomous SE is decreased and the new IAT to examine the effectiveness of the programs.

---

\*Department of Human Development, Naruto University of Education

\*\*Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education